

江橋 崇 著

花札 〈ものと人間の文化史 167〉

ISBN 978-4-588-21671-8 C0321

四六判・上製 374 頁 予価 (本体 3500 円+税)



江戸時代中期の手描き花札

花札は、その傑出したデザインをはじめとする独自性によって、海外からも注目される日本の重要な文化遺産の一つである。しかし、花札＝賭博という強固なイメージが災いして、これまで、研究者によって正面から取り上げられることは少なかった。多くは清水晴風説の無批判な踏襲であり、コレクターによる所蔵品の紹介に止まり、あるいは信頼性に乏しい業界伝説等に基づく記述であった。

本書は、その現状を打開すべく、法制史をはじめ文学作品におよぶ膨大な文献を渉猟し、海外の研究も参照して、その誕生から現在までを辿り、絵柄の変遷にまつわる数々の謎、各時代における賭博性の有無、取締りの実態、さらには日本の植民地経営において花札がいかに利用されたかまでを明らかにする。

一般的な花札に止まらず、「山形花」や「花巻花」等の地方花、「朝鮮花」等の植民地花にも目配りして執筆された初の本格的な研究であり、花札をその本来の輝き、自然を敬愛して共存する日本の文化という特性のうちに描いた力作である。

主要目次

はじめに

序章 花札史研究の課題と方法

- 第1章 花札の誕生 賭博文化が盛んな中で (江戸時代中期)
- 第2章 花札の普及 それは博奕用具だったのか (江戸時代後期～明治前期)
- 第3章 花札の自由化 花札解禁と大流行期の到来 (明治中期)
- 第4章 花札の公認 大日本帝国における (明治後期～昭和前期)
- 第5章 花札の衰退と再興 花札文化に未来はあるか (昭和後期、平成期)

おわりに

索引



豊原国周の浮世絵「花合四季盃」(小野道風と韓信)

江橋 崇 (えばし たかし) 1942年に生まれる。1966年、東京大学法学部卒業。法政大学法学部教授 (憲法学) を経て、現在、同大学名誉教授。遊戯史学会副会長。著書に『「官」の憲法と「民」の憲法』(信山社)、『外国人労働者と日本』(岩波ブックレット)、『市民主権からの憲法理論』(生活社)。共編著に『外国人労働者と人権』『グローバル・コンパクトの新展開』『企業の社会的責任経営』『東アジアのCSR』(以上、法政大学現代法研究所発行/法政大学出版局発売)、『外国人は住民です』『人権政策学のすすめ』(以上、学陽書房)、『象徴天皇制の構造』(日本評論社)、『岩波講座 現代の法』(岩波書店)、監修に『図説 カルタの世界』(大牟田市立三池カルタ記念館)、『麻雀博物館大図録』(竹書房)、『総合的学習に役立つ くらしと国の省庁』(小峰書店)。

----- 切り取って最寄りの書店にお渡し下さい -----

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-3 **法政大学出版局** TEL03-5214-5540 FAX03-5214-5542

注 花札 〈ものと人間の文化史 167〉 (冊)

ISBN 978-4-588-21671-8 C0321 予価 (本体 3500 円+税)

書店名・
番線

注
文
書

お名前: _____

ご住所: _____

お電話: _____